立ち止まらない、青春

ハツラツ

R65 FREE MAG

2022 SPRING

VOL. 002

INTERVIEW

犬飼 啓樹

_ KEIJYU INUKAI

みんなの笑顔から成長できるという喜び

大道芸人

“GWU”グウさん

INTERVIEW KEIJYU INUKAI

犬飼 啓樹（72）名古屋市名東区在住

みんなの笑顔から成長できるという喜び

真面目すぎて不器用な男だと思っていたけど、
改めて自分がこの年齢になって思うのは、
大道芸をずっと追い求める父親の姿を見て尊敬できるなと。

TEXT _takashi“sincere”kato
PHOTO _ana

72 OLD

久しぶりに父と語り合った

名古屋市の星崎にある介護施設でのパフォーマンスの後に横並びになって、久しぶりにお父さんとゆっくり話ができた。芸人名は“GWU”グウさん。
自分が実家を出て17年、実家にいる頃はよく話をしたが、最近こうやってゆっくり話すことがなかったから、久しぶりにまじまじと顔を見たらちょっと老けたなぁって。
それまで会社勤めして真面目に働いていたお父さんが、ある日突然ジャグリングを始めた頃の記憶が蘇ってきた…。元々、多趣味だったので違和感はなく、また面白いことを始めたなぐらいだった。そんなお父さんを姉は無視していたけど(笑)

一時期はピエロのメイクをして芸を披露していた。
今回の取材でもう一度ピエロの白塗りをリクエストしたが…了解してくれなかった。

「もう20数年前の50代でサラリーマンの頃かな、ボールジャグリング(日本での名称はお手玉)との出会いは日常の偶然だった。テレビで観た新春かくし芸番組で芸能人が見事に5個のボールを回していて、凄いなぁ、こんなことができるんだ！と魅了され感動して興味を持ったのが最初。リズムよく投げられたボールの美しい軌道に魅せられ、その道具と技の「やり方」を探し始め、まず道具を探し回ったところ東急ハンズでみつけたんだわ。
セットでゴムボールが3個と、虎の巻と書かれた薄い説明書レベルの冊子が入っていて、そこで初めてジャグリングという言葉を知り3(スリー)ボールジャグリングから練習を始めたかな」

ジャグリングを初めて知ったときにこの本から学んで、一生懸命練習を重ねた。

大切に保管していた昔の本や資料を見返しながら、しみじみと語った。
その当時、自分もそのボールをちょっと挑戦したことがあった。そしたらすぐにできてしまって、それを見たお父さんは悔しがってたよねって言いながら思い出話に笑った。
そして、2001年静岡大道芸、2002年野毛大道芸という大きな大会があって、母親と一緒に観に行き、かなりの影響を受けたという。「そう、感動を超えて、その存在感に圧倒されたよ。ますますジャグリングに魅かれてまったね(笑)」

「ひとりの練習の限界を感じて、短期間で学べるところに通った。ボール、リング、バルーン、マジック(手品)、パントマイムと中高年の体力に限界を感じながらも、会社帰りに練習を続けたね。その頃から知り合いの結婚式や子供会、学童保育所などから依頼されるようになったんだわ」

その当時、まだ大道芸を始めたばかりのお父さんに依頼の声がかかることに驚いた。息子として嬉しかったけど、内心ヒヤヒヤ心配だった記憶がある。
その後、2008年の出来事だった。中川生涯学習センター(名古屋市中川区)「私にもできる大道芸講座」を受講した際に、そこで「大道芸を発表する場をつくりませんか」とお誘いを受け保母Kさんが所属するボランティアの参加を決め、そこから本格的なグウさんオンステージが始まった。
家の和室が練習場所。低い天井で一生懸命に練習しているお父さんの姿を見ては、よくやるなぁって思っていた。ボールから始めたパフォーマンスだったが、新しい道具も徐々に増えていった。クラブ、デビルスティック、ディアボロ、スピニングプレート(お皿)、シガーボックス、スカーフ、曲傘。一輪車を見ながら、転んで頭打たないか？って道具が増えるのと一緒に僕の心配事も増えていった。最近はウクレレの演奏もやっている。

「芸は一朝一夕で上達するものでもないし、日々の積み重ねが大事。”100回の稽古より1回の本番”とも言う。この言葉は本当に胸に刺さるね」

”100回の稽古より一回の本番”とも言う。この言葉は本当に胸に刺さるね

_ VOICE

大道芸を20年続けてきていちばん嬉しかったことは？って尋ねたら「大須演芸場で誕生日にパフォーマンスを披露できたこと」と即答で返ってきた。
過去にグウさんを知った名古屋市の職員の方からの依頼だった。当日、パフォーマンスが終了して再度ステージに呼ばれ、グウさんの誕生日を祝って花束の贈りもののサプライズ。憧れの舞台でもある大須演芸場で感激した70歳の誕生日だった。きっと泣いて喜んだに違いない。
今後チャレンジしたいことは、新春かくし芸の番組で見て感動した５ボールジャグリング。
難易度はかなり高く、お父さんがジャグリングを始めた頃からずっと言っていた5ボール。
今も練習に励んでいる。５ボールを練習している姿をずっと見てきた。ずっと挑戦している様をみて凄いなぁって純粋に思う。そしていつか必ず成功して欲しいと願う。

「自分にとっては非常に難易度が高いんだわ。簡単にできていたら、ここまで続けられなかったかな。５ボールは諦め切れないんでね。生きている間に達成したい。ぜひその姿をご披露したいね」

昔はそんな社交的に思えなかったお父さん。人前が苦手だと勝手に思っていたけど、全くそうでないお父さん。大道芸を始めて今まで続いているのが意外にも感じるけど、やっている姿と話を聞いて自分も年齢を重ねていくうちにお父さんの見え方が変わったとちょっと実感した。

「大道芸の素晴らしさは、何よりも私を見て下さる方の笑顔から私が成長できるという喜び。人と人との繋がりと、新しい出会いが私に大きな夢を与えてくれていると思うのです」

PROFILE
KEIJYU INUKAI

犬飼啓樹（愛知県名古屋市 72 歳）

1949 年　5 人兄弟の末っ子として生まれる
1968 年　通信事業会社に就職
1998 年　ジャグリングに出会う（テレビ番組視聴）
2001 年　ピエロキッズパフォーマンススクール養成コース受講（中区）
2002 年　平朝日新聞　異色の中年ピエロとして社会面に掲載される
　　ZIP-FM(FM 名古屋）ライブプログラム
　　『ZIP MORNING PRESS』でインタビューを受ける
　　名古屋東文化小劇場でピエロキッズパフォーマンススクールの発表会
　　タイトル「赤い鼻を探せ」
2005 年　クラウンファミリープレジャーＢ　パントマイム初級講座受講（中村区）
2008 年　中川生涯学習センター　私にもできる大道芸講座受講（中川区）
2010 年　クラウンファミリープレジャーＢ　第 18 期クラウン入門講座受講（中村区）
　　勝笑演芸一座座員となり、愛知・岐阜・三重地域で訪問演芸を始める
　　通信事業会社を定年退職
2018 年　大須演芸場でパフォーマンス（名古屋中区いきいきセンターより依頼）
2020 年　名古屋市北区、中村区、南区、熱田区（高齢者施設）にて
　　月１回定期演芸会を始め、現在も続いている

INTERVIEW KAZUO KATO

BLUES PLAYER

アメリカでの栄光と挫折、43歳で脱サラ、度重なる失敗…「貫くは自分らしく生きる」という一念

加藤 千雄 (68) 愛知県西尾市在住

伝説的ブルースギタリスト、エルヴィン・ビショップ
ロック界きっての荒くれベーシスト、ティム・ボガードと
セッションした加藤千雄さん
現在は故郷西尾市でライブハウス「Crossroad House」を経営し
自らも演奏を続けながら音楽仲間に演奏するステージを与えている
プレーヤーとしてのアメリカでの栄光と挫折
夢を諦めた末のサラリーマン生活、また両親との別れ
離婚など高い山、深い谷を乗り越えて行き着いた境地は
「世間体を気にして何になるんだ。自分らしく生きたい」
将来に対する不安を抱える人々が多くなっている今、加藤さんの生き様に迫る

TEXT&PHOTO _MASA

68 OLD

内向的な少年時代。人と比較するのではなく自分はどうしたいのか？

西尾市西幡豆町で紡績業を営んでいた父と母との間に生まれた加藤千雄さん。テレビで流れるアメリカンポップス、ロカビリーに心を奪われたことが音楽にのめり込むきっかけでした。

「小学2年生でロカビリーを聞いた時、メロディーラインやリズムが日本の音楽と違う次元のもので自分の一番の深いところに伝わってきた。自分も同じように演奏したり歌ったりできたら良いなと真似していた。そして小学5年生の頃にビートルズやベンチャーズが日本で流行り、中学2年生で初めてギターを手にして、バンドも組んだ。子供の時は少しませていて、いつも年上の先輩たちと遊んでいた。同級生とは音楽的に合わなかったこともあるけれども、背伸びしていたのではないかと思う。早く大人の仲間入りしたい、テレビの向こうのスターのようになりたいという憧れが強かったと思うよ」

憧れと同時に「自分らしさ」も追い求めていた加藤さんは、父・正勝さんの影響を受けていたことを今となって感じるそう。

「たくさんの友達と遊んでいたが自分流に変えて面白く遊んでいたね。それは浪曲師、講談師になりたかった目立ちたがり屋の父親譲りだったかもしれない。そんな親父に言われたことで印象に残っているのは「自分が思っていることは言った方が良いんじゃないか」という言葉。自分は内向的だったので、親父から見たら歯がゆい部分があったんでしょうね。今思い返せばその言葉によって自分には音楽があり、音楽だけは自分の思っていることを素直に表現できるという気持ちにさせてもらえたんだよ」

中学でバンドを組み、高校入学後は流行のフォークソングでソロ活動していた加藤さんは高校卒業後ロックのルーツであるブルースの基礎を身に付けるために、1年間自宅にこもったんです。その後音楽プロダクションに所属し、キャバレーや温泉街で演奏を積み重ね、東京や大阪の輝かしいステージでギタリストとして活躍。ダウン・タウン・ブギウギ・バンドの前座で演奏するなど名声を得ていったのです。そして本場アメリカでの挑戦を夢見るようになっていく。

「一部のプロミュージシャンが本場アメリカで勝負するために渡米していてね。その流れで自分も渡米して、自分の技量がどこまで通じるものか?とチャレンジしたくなり25歳から5年間勝負した。当然ゼロからのスタートで始めはストリートミュージシャンとして一人で演奏していた。歌を歌えないし、英語を流暢に話すこともできないので小さいストリート用のアンプを買って路上でギターを弾いていたんだよ。すると周りのストリートミュージシャンが声を掛けてくれてバンドメンバーの一員となったこともあった。またクラブのオーナーから「今晩うちに来て演奏しないか」という誘いもあり活動の幅が広がった。そして伝説的ブルースギタリスト、エルヴィン・ビショップ、ロック界きっての荒くれベーシスト、ティム・ボガードとセッションすることもあったんだよ。なんでも挑戦したい20代後半で、思いもかけない結果が出た時期だったな」

サラリーマンをやめ「自分らしさ」を追い求める決断へ

順風満帆なアメリカでの生活を過ごしていた加藤さんでしたが自分の技量に行き詰まりを感じていました。そんな時に父・正勝さんの危篤の連絡が入りました。そして音楽活動を断念し、サラリーマン生活へと。

「ロックの殿堂入りを果たした伝説的ギタリストのカルロス・サンタナの親戚の強い推薦があり、サンタナのオーディションに参加する予定だったが30歳で帰国し、すぐに親父が亡くなってしまい、翌年にはおふくろも亡くなってしまった。その頃自分の演奏に限界を感じていたし、良い話ではないけれどもオーバーステイで3年間出国禁止の状態になっていた。長男だし、実家をそのままにしておくわけにはいかなかった。そして帰国後に結婚し子供も授かったため、しっかりした職に就こうと、以前から興味があったパン職人を10数年続けました。その間音楽活動は一切しなかった」

しかし43歳でサラリーマン生活に終止符を打った加藤さん。自らのライブ活動を再開でき、一般の人々も演奏を楽し

める場所を提供したいと考えるようになりました。
「子供の頃に自分で決めていた「自分らしく生きる」という原点に戻って音楽活動を再開したくなった。サラリーマン生活の10数年間、やはり自分の中で温まっていたものがあってね。生活のことも当然頭にあったが、「自分らしく生きたい」という一念で思い切って結論を出した。自分の演奏で食べていくプロミュージシャンではなく、飲食店を経営しながら、その場所で自分自身もライブ活動を続けていきたいという方向性でやってきた。今のこの店「Crossroad House」は職を持った人が夜に音楽を楽しめる場所になってきた。自分自身がサラリーマン生活を経験したからこそこのステージが出来た。自分自身も若い世代とセッションすることでエネルギーをもらえている。若い人と今度こういう曲を演奏しようとか、68歳になった今でも自分には燃え尽きてないものがある」
アメリカでの栄光や挫折、サラリーマン生活を振り返ってみて思うことをいくつか語ってもらいました。
「たくさんの失敗や職を転々と変えた時期もあり、人にお世話を掛けた時期もあったけど、やってきたことは身になっているし、無駄なことはなかった。人にお世話を掛けたことは「すいません」ですが音楽に向き合う気持ちはいつも純粋で毎日必ず2時間歌ったり、ギター弾くことは欠かさずにやっていた。根っから音楽が好きで音楽でしか自分を表現できないとわかっていますから。自分には音楽がそうですが、本当に自分の好きな趣味とか持っている人は気持ちを若く保てると思う。音楽があって自分は幸せだった」
最後に、現在「人生100年時代」「少子高齢化」など言われ不安を感じている人々へメッセージをたずねました。
「家族を持っている僕の周りの人でも生活の安定を考える人が多く、それは当たり前のことだと思うし、僕もそういう時期もあった。ただ自分はこの歳までやりたいことをやってきた人間だから言えることじゃないですけど、自分の得意なこと、好きなことを一生懸命やっていると、それに対する見返りを求めないですよね?見返りがなくても純粋にそのことを継続することができて、それなりに結果が付いてくると思うんですよね。だから若い人に言いたいのはみんな自分の弱点とか克服して平均的に安定して生きていくのではなく、自分の得意なことを、その時期に芽が出なくてもやり続けていくことを伝えたい。結果を求めるよりもそのプロセスを楽しみながら生きた方が「自分らしく生きられる」と思う。
未来ばかり見据えるよりもその日その瞬間を大事に生きていってほしい。今日を次の日の足掛けにするのではなくて、今日は今日しかないっていうこと。自分は、特にギターを独りで弾いていると思うんですよ。今日このプレーは今日しかできない。次の日のためにプレーするのではなくて今日のひらめきとか創造性を大事にした方が良いのではと思う。その積み重ねがその人の人生となり、「自分らしく生きる」につながると思う」

弱点を克服して平均的に安定して生きるのではなく、
自分の得意なことを継続することを伝えたい。
また未来ばかり見据えるよりも
その日その瞬間を大事に生きていってほしい。

_ *VOICE*

Crossroad House

住所／愛知県西尾市西幡豆町山副25-1
電話／ 0563-62-2231
営業日／金・土・日曜日
営業時間／ 18:00 OPEN

PROFILE KAZUO KATO

加藤千雄（愛知県西尾市 68歳）

1953 年　愛知県西尾市西幡豆町に生まれる
1960 年　小学２年生 アメリカンポップス、ロカビリーに心を揺さぶられ、バーモニカで演奏を始める
1963 年　小学５年生 ビートルズ、ベンチャーズの音楽に感化され音楽の道を目指す
1966 年　中学２年生 ギターを始めバンドを結成
1971 年　高校卒業後 ロック、ブルースの基礎を独学で習得
1972 年　20 歳 音楽事務所に所属し、キャバレーや温泉街でバンド演奏を開始
1977 年　24 歳 東京・大阪を中心に活動し、25 歳でアメリカへ
　　ストリート、クラブでの演奏の他にエルヴィン・ビショップ、ティム・ボガードとセッション
1983 年　30 歳 父の危篤により帰国。帰国後父は亡くなる
1984 年　31 歳 母も亡くなる。音楽の道を断念し、サラリーマン（パン職人）へ転職
1986 年　33 歳 結婚後、2 人の子供を授かる
1996 年　43 歳で脱サラし 3 年後、飲食店を営む一方でライブ活動を再開
2006 年　53 歳 離婚
2010 年　故郷 西尾市西幡豆町にライブハウス「Crossroad House」オープン～現在に至る

HONDA
め 37-50

人生一筋 モノ集め

75 OLD

INTERVIEW CHIKARA SAMIZO

ホーロー看板収集家

佐溝 力（75） 愛知県豊川市在住

気付けば、家に収まらなくなっていた
レトロなホーロー看板を集めて半世紀
自宅の庭にまであふれ出た
コレクション収集に捧げた情熱を
福祉にも役立てる

TEXT&PHOTO_HIRO

懐かしい看板
熱く語る世相の魅力

豊川市の自宅に開設した「看板と広告の資料館 琺瑯看板研究所」は、足の踏み場もない。廊下や階段、壁や天井までホーロー看板でギッシリ。明治、大正、昭和にわたり、オロナミンCやグリコ、太田胃散やオロナインなど、商品や企業の懐かしい看板が所狭しと置かれる。

「ホーロー看板は商品広告だもんで、当時の世相が表れとると思うね、僕は。昔は街中に貼ってあって、お天道様に照らされてピカピカ光ったりして。そういうことも含めて、日本のポップアートなんじゃないかなと思うね」

佐溝さんが言う「世相」とは？　例えば薬の「仁丹」の看板。ナポレオン帽を頭に、大礼服を着た紳士が描かれるが、日露戦争の直後ということで、立派な長い髭と筆文字はロシアに勝ち意気揚々とする日本人を象徴しているという。腹痛に効く「正露丸」も、明治時代の物は「征露丸」と書かれ「もともとは陸軍の軍医が開発した薬で、日露戦争の際にロシア（露）を征伐するという意味が込められた」。塩の看板は「しほ」と平仮名で書かれるが、よく見ると「ほ」の字の右上の部分が突き抜けており、佐溝さんは「天井をなくして、売り上げがどこまでも伸びるようにという願いが込められている」と力説する。

「子どものころは勉強ができず、大嫌いだった」と明かす佐溝さん。しかしモノ集めをすれば常にクラスで一番だった。昆虫採集でも植物採集でも負けたことはなく、「勉強ができず劣等感の塊だった分、モノ集めを一生懸命やったね」と振り返る。

同じくらいのめり込んだのが旅だ。16、17歳のころ、友人と自転車やヒッチハイクで北海道や伊豆半島などを一周した。仕事でも遠方へ出掛けたいと思い、20代で長距離トラックの運転手になり九州や四国、東北まで走った。バイパスなどの新しい道路は通らず、常に旧道を走っていたが、この時にホーロー看板と出会った。

「民家の壁に貼ってあるのが目についてね。最初に奥三河の方に行って譲り受けて、静岡、岐阜、長野など中部圏を巡って集め出した。インターネットが普及してからはどんどん買った。20万、30万円する看板もポンポン買っていたから、つぎ込んだお金は何千万円かいってるかもね」

〝家族〟との別れ
コレクションで福祉活動

2021年春、長年集めた5000枚以上のホーロー看板を、以前から交流のある北名古屋市歴史民俗資料館に寄贈した。大金

_ VOICE

ホーロー看板は日本のポップアート

紳士が描かれた「仁丹」の看板からも、当時の日本の世相が分かる

_ VOICE

僕よりも先輩の人たちを元気にしたい

をつぎ込み、毎日を共にしてきた看板たちとの別れにも「全然寂しくないよ。家の中がさっぱりするから」と笑顔。「僕が保管するよりも、ちゃんとした博物館で保管してもらって、皆さんに観てもらった方が、看板が喜ぶよね。僕はいつでも観に行けるから」。

看板だけでなく、昭和の生活用品や発明品も集めてきたが、これを活用した「回想法」にも取り組む。福祉施設や公民館に出向き、高齢者の前で蓄音機でレコードをかける。冷蔵庫がなかった時代、食料を保管する蝿帳（はいちょう）や、ハエの退治に使った蝿取り棒なども見せる。昔を思い出すことで脳が活性化され、介護予防につながる。

「僕自身も高齢になってきて、僕よりももっと先輩の人たちを元気にしたいと思うようになった。お年寄りは老人ホームに入ったら安心かもしれないけど、入る前が肝心だから。健康寿命を引き延ばせるから、続けていきたいね」

福祉施設などで行う講座は、すべて無料で引き受けている。「ボランティアでやっとるよ。ガソリン代ももらわない。自分でガソリン代を払ってでもやりたいじゃん、僕は」。亡き母は生前、収集の趣味に好意的ではなかったが「小学校に出前授業で招かれるようになると、おふくろも少しは認めてくれた」という。

優しく無邪気な笑顔を浮かべる佐溝さんの元には、モノも人も集まってくる。

元気ハツラツ!
各種ビタミン・アミノ酸添加
オロナミンC
ドリンク
炭酸飲料
黄金バット
大塚化学
たばこギフト券
取扱店
Smokin' Clean
コバタ
コバタ

HAVE A NICE DAY.

熊野川と共に暮らすことがハツラツ!!

01

中山 敏男さん(71歳)

三重県熊野市在住／熊野市出身

世界遺産熊野古道を流れる熊野川舟下り現役の船頭さん。これ以前は郵便局を辞めて約20年間、上流の北山川筏下りの筏師。何人もの弟子を育て、伝統と技術を繋いできた。中山さんにとっての川とは「生き物」どんな時も侮ってはいけないもの。とは言ってもやっぱり楽しいからこれまで続けているそう。最上流から海の見える河口まで、川に生まれ川と暮らす。

ベストショットのために車中泊でハツラツ!!

02

浦野 晶澄さん(69歳)

豊川市在住／豊川市出身

三度の飯より写真が好き。写真家の浦野さんは連休ともなれば、どこへでも車を走らせる。もちろん、奥様の許可を得た上で。撮影先ではホテルで休みたいところだが、夜明けの美しい景色を撮る時は車中泊をするほどの力の入れよう。納得がいく写真が撮れるまで、同じ場所へ３回も行ったこともある。父の保さんは生前、仏塔を愛していたため、形見の写真を使って親子展を開いたことも。「仏塔を調べるうちに興味深くなってしまった。父のように夢中になるのかな」と好奇心がおさまらない。

粉末緑茶と梅酒 withかみさん and 駅伝部員

米津 倍之さん(78歳) 愛知県西尾市在住

安城学園高校 陸上競技部を2020年、2021年と２年連続で全国高校駅伝に導いた名コーチである米津さん。部員の指導の傍らランニングも欠かさないハツラツの源は「粉末緑茶と梅酒」。

部員に「コーチ、お腹が出てきたよ」の一言をきっかけに、粉末緑茶を4杯、そして妻・典子さん手作りの梅酒1杯を毎日欠かさない。

そして何よりのハツラツの源は「部員たちが良い練習を重ねて結果を出してくれること」

安城学園高校の陸上競技部の部員はいつも笑顔に溢れているが、その中心には最高の笑顔で部員を支える米津さんの姿がある。

「ハツラツYoutube」ではかみさんとの戦闘→感謝→ピーちゃんとの癒しタイムをご覧いただけます。「男にしかわからない気持ち」ご覧ください。

>>> https://youtu.be/Am86GZEc2Eo

BASEBALL LOVER

INTERVIEW MAKOTO MORIKAWA

いつまでも、至誠一貫

森川 誠（66）愛知県知多市在住

いくつになっても、夢は叶えられる
甲子園出場を果たせなかった森川さんは
45年の月日を経て、違う形で実現させた
絶えることのない夢や目標を胸に
生き生きとした毎日を送る

TEXT&PHOTO_HIRO

66 OLD

念願の夢の時間
反骨精神の学生野球

ついに憧れの聖地に足を踏み入れた。2018年秋、各県の予選を勝ち抜いた高校のOBが集まるマスターズ甲子園。大府高校の森川さんの甲子園デビューは、4回表のバッターボックス。白球に目を凝らし、バットを振り抜いた。結果は「火の出るようなボテボテのセカンドゴロ(笑)」。その裏、二塁の守備にも就いた。「甲子園のグラウンドはこんな感じなんだなと。絨毯というか、雲の上に立っているようでフワフワとした感じ。地に足がつかないまま、あっという間に終わったね」。夢を45年ぶりに叶え「幸せだなあ」を実感した。

小2の頃、父親がグローブを買ってくれて、地元の中日ドラゴンズに夢中になった。通っていた東浦町の小学校には野球部がなかったが、友人らと教員に懇願してソフトボール部を発足させた。「いま思えば、これが野球の技術を身に付ける原点になったかな」。卒業文集には「将来はプロ野球選手になる」と綴った。中学では県内で指折りの選手に成長し、当時、東邦高校で監督を務めていた阪口慶三監督が視察に訪れた。特待生としての強豪校入学に期待で胸が膨らんだが、選ばれたのは別の選手だった。前を向き、当時ドラフト1位でプロを輩出した大府高校に進学した。「反骨精神というか、選んでくれなかった東邦を倒して甲子園に行くんだという気持ちをバネに頑張れた」。高校では不動の遊撃手となり、東邦戦では打ちまくった。春の県大会ではサヨナラ打を放ち、3打席連続で敬遠されたことも。それでも、最後の夏の決勝では東邦に敗れ、甲子園出場は果たせなかった。

水島新司さんに描いてもらった直筆サイン画

監督の勧めで東京六大学リーグの名門、慶應義塾大学を受験。全国から来た有望選手7人と豊橋で受験合宿が始まり、この中に後に巨人で活躍する江川卓さんがいた。すでに世間の注目の的だった江川さんは東京での勉強会の最中、漫画「ドカベン」の作者、水島新司さんを呼んだ。ステーキをご馳走され、似顔絵付きの直筆サインで激励してくれたが、結果は不合格だった。

初志貫徹を胸に浪人し、1年の猛勉強を経て、慶應義塾大学の門を開いた。しかし入部直後、バッティングピッチャーを務めていた時、肩に痛みが走り、ボールが投げられなくなった。合宿所では掃除、ボールやスパイク磨きの毎日。法政大学に入り、即戦力として活躍していた江川さんからは「早く出てこいよ。緩いボールで打たせてやるから」と発破をかけられたが、治療の甲斐もなく、野球ができないまま1年が経とうとしたころ、退部を決意した。「これ以上、親に迷惑をかけたくない。野球はこれで一区切りにしようと決めた」。

高校３年時、豊橋に集まった７人衆(右から2人目が森川さん)。後列左から江川卓さん(後に巨人)、中尾孝義さん(後に中日)、植松精一さん(後に阪神)らと猛勉強に励んだ。

高校3年時には、江川(栃木)、中尾(兵庫)らと共に愛知県代表として、日本学生野球協会から表彰されブロンズ像を贈られた。その時やっと、「お前もそんなにすごかったのか」と認めてくれた。

「紙の力でスポーツ隆盛を」
聖地への次なる目標

当時は主流だったUターン就職で、半田市のミツカンに就職した。主に卸部門で経営企画に携わり、2006年から関係会社の中埜総合印刷に出向。副社長として経営をサポートする傍ら、観光情報誌「ぶらりぐるり知多半島」などの発刊を手掛けた。2014年からは、自らが編集長としてスポーツマガジン「Standard愛知」を発刊。アマチュアを中心に地元のアスリートを特集する雑誌に「何よりコンセプトに共感した。強豪に限らず、いろんなチームの選手にスポットを当て、家族との絆や地域との関わりを紹介する。採算面だけでなく、事業として意味のあることを続けていきたいと思っています」。読者から感謝の言葉が寄せられると、やりがいを感じる。

「standard 愛知」の編集長として、豊富な人脈も生かし、スポーツの力で地元愛知に元気を届けている

マスターズ甲子園の打席では、セカンドゴロに倒れたが、夢を45年ぶりに実現させた。
甲子園の土も大切に保管する(下)

_ *VOICE*

あっという間だったけど、
幸せだなあ

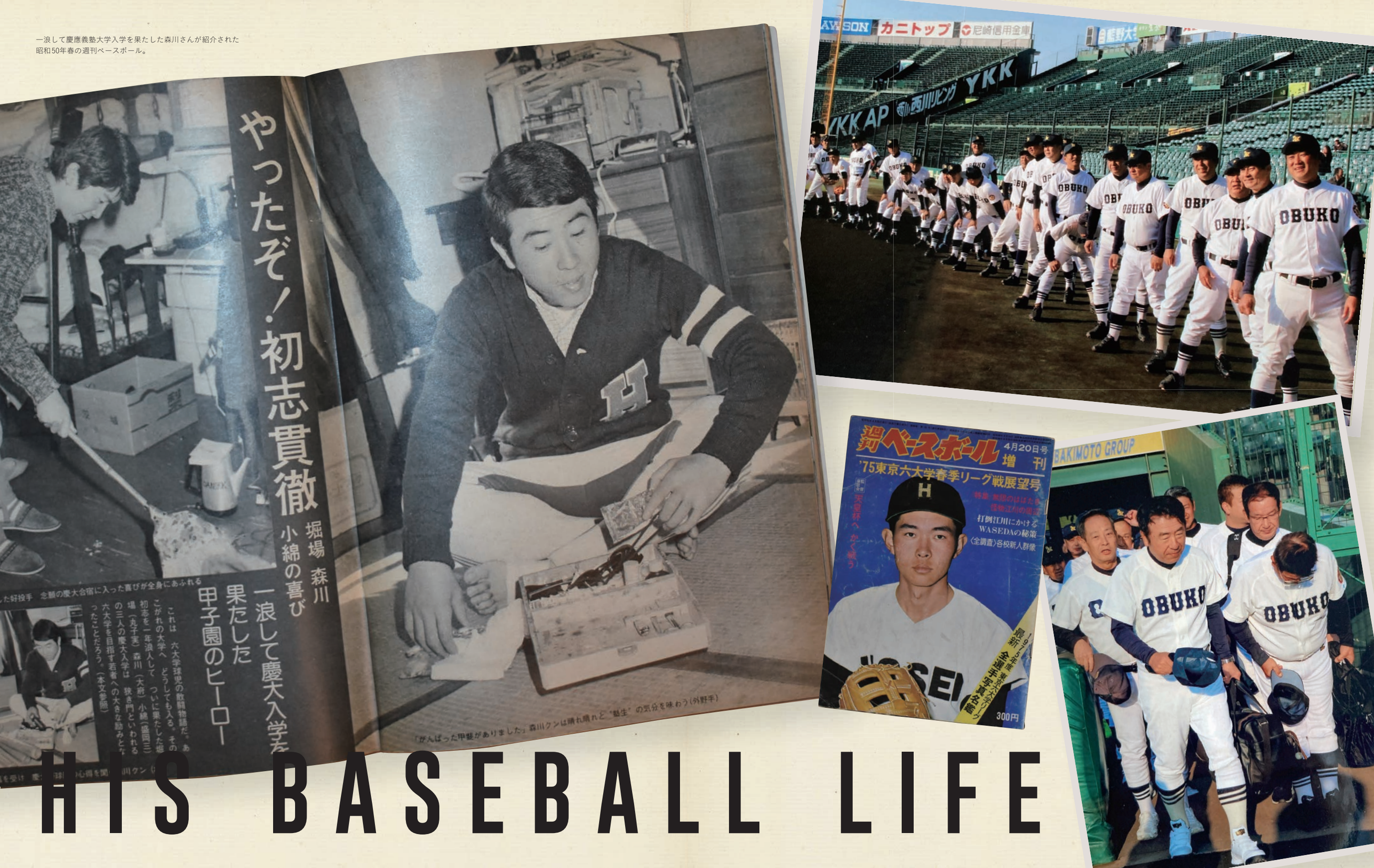
スポーツの世界に戻ったことで、阪口監督(現・大垣日大高校監督)と再会を果たした。特待生の候補に挙がった中学の頃のことを話すと、阪口監督は「俺も見る目がなかったんだな」と言ってくれた。

昨年、役員定年を迎えたが、引き続き「Standard愛知」の編集長として現場へ足を運び、休日は野球やゴルフで汗を流す。母校ではコーチの立場で野球部の歴史や愛知県、日本の高校野球史を選手にレクチャー。「昔があって今がある」ことを伝え、感謝の想いを胸に甲子園を目指してほしいと願う。

新しい目標もできた。大府高校の歴史をまとめた書籍の発刊と、もう一度マスターズ甲子園に出場することだ。

「次は、ヒットを打ちたいね」

一浪して慶應義塾大学入学を果たした森川さんが紹介された
昭和50年春の週刊ベースボール。



誰もが平等に歳をとり、誰にでもやってくる65歳からのシニア世代。
これからどんな心構えでシニアを迎えたらいいのだろう？
シニアを迎えた今でも「まだまだ終わらない青春」を謳歌している人たち。
今回取材させてもらった人たちからも大きなエネルギーを感じ、
人生のヒントもたくさんありました。
歳を重ねていくのが楽しくなるような、そんなマガジンを
コツコツと作っていきますのでよろしくおねがいします〜！

ハツラツ設置店リスト

only free paper名古屋（名古屋市中村区）
STILL THINKING COFFEE（名古屋市中区）
POCKET FACTORY/豆一鐵（名古屋市北区）
Nancy名古屋（名古屋市東区）
Cedar's（名古屋市中区）
Humming Bird（長久手市戸田谷）
斎藤吾朗アトリエ（悠創館）（西尾市伊藤）
お菓子の店オカヤス（西尾市末広町）
井上歯科医院（西尾市今川町）
なごみ接骨院（西尾市山下町）
青山自動車（西尾市緑町）
cafe LUKE（西尾市羽塚町）
flower design shop FIORE（西尾市高畠町）
レストランさかえ（西尾市鶴舞町）
豊川市観光協会（豊川市諏訪）
カフェ・ギャラリー栄知村（豊川市国府町）

INFO&OURS

募集中!!

「ハツラツ」で取り上げてほしい65歳以上の元気なシニアの方々を探しています。
自薦、他薦、問いません。お知り合いやお近くに「こんな人がいる」といった情報もお待ちしております！
また、当フリーマガジンを設置してくれるお店や施設がありましたら、お気軽に下記までご連絡ください。郵送で発送させていただきます。

ハツラツができること

あなたのオリジナルブック作りませんか？
「団体やチーム、イベントなどの写真を撮ってほしい」
「子どもや孫の音楽会の映像を撮って編集してほしい」
「ホームページを作ってほしい」
など、なんでもお気軽にご相談ください。

お問い合わせ先

ハツラツ編集部
愛知県名古屋市中区錦2-10-8　301
TEL&FAX / 052-222-6002
MAIL　info@ha2ra2.jp
WEB　https://www.ha2ra2.jp

編集長　Hiroki"route66"yoshimoto
編集　Masao"machao"Anno
Katsuhiko"ana"Kitagawa
Takashi"sincere"Kato

デザイン　Keisuke"praything"mizuno
Kazunori"quick"ito

発行元　ハツラツ

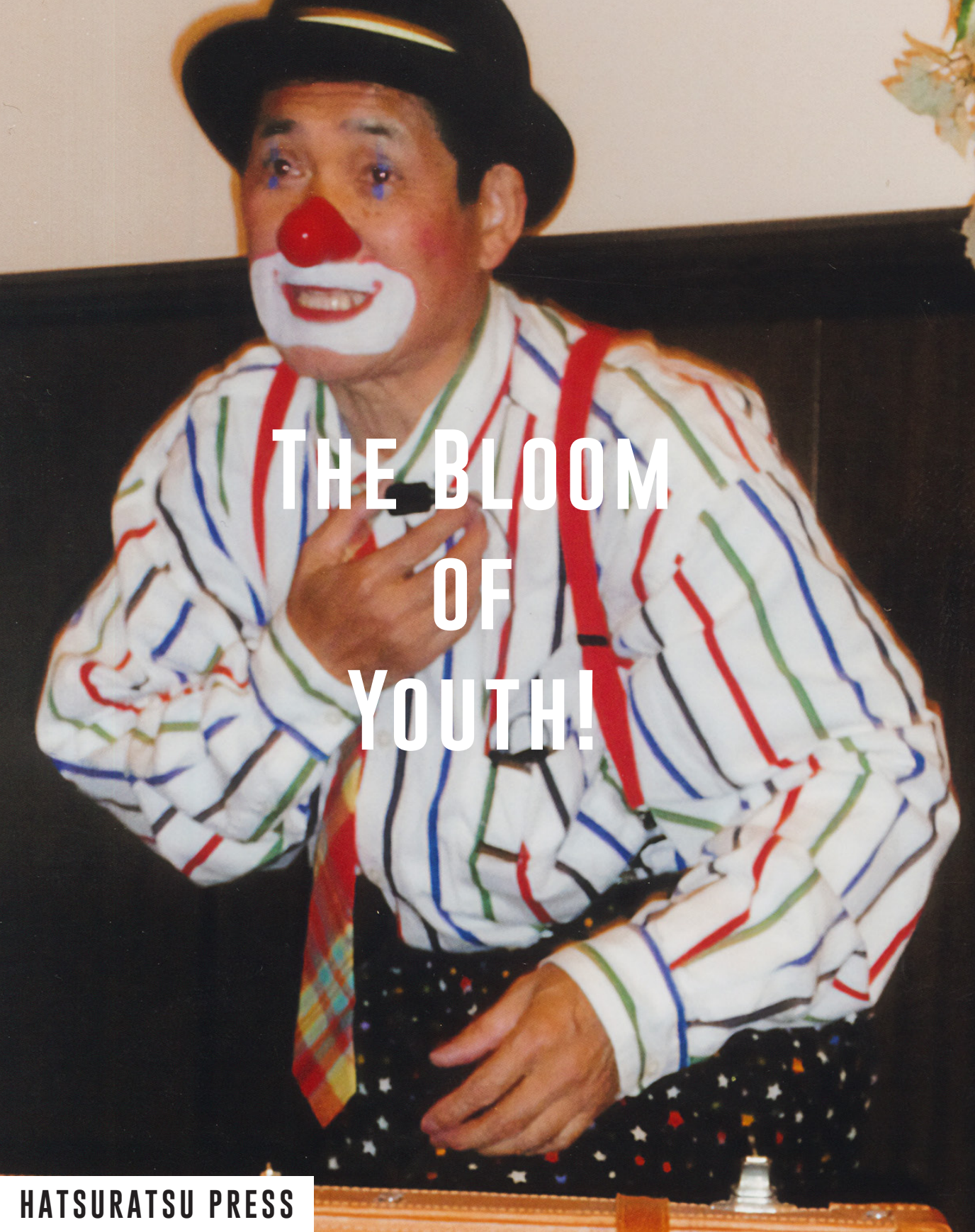
2022年4月1日発行

YouTube　Instagram

HA2...RA2

毎年恒例
愛知・岐阜・三重の高校野球 特別拡大号
“いざ、聖地へ”
2022年夏、開幕
6月21日発売予定!!

愛知をひとつにするのはスポーツだ!!
AICHI Sports Magazine
Standard愛知



The Bloom of Youth!

HATSURATSU PRESS